

まぼろしの村はどこに

手島悠介・作／藤沢友一・絵



■著者紹介 手島悠介

1935年台湾高雄市に生まれる。学習院大学中退。

作品には『手紙になったリンゴ』『二十八年めの卒業式』『はばたけはとさん』『ふしぎなかぎばあさん』『むかしへとんだ犬』『かべにきえる少年』など多数ある。訳本に『ぶんぶんぶるるん』がある。

*現住所＝〒115 東京都北区桐ヶ丘
2-14 N15-8

■画家紹介 藤沢友一

1922年北海道小樽市に生まれる。東京美術学校卒。個展、グループ展多数開く。

1965年ごろから児童書のイラストレーションを手がける。

作品には最新著作『太陽の絵筆―熱情の画家ゴッホ』のほか『二人ともパンのにおい』『はしれクラウス』『さよならよざえむさん』など多数ある。

*現住所＝〒153 東京都目黒区中目黒
1-1 フラワーマンション307

913

手島悠介

まぼろしの村はどこに

国土社 1979

70P 22×19cm (国土社の創作どうわ10)

基本カード記載例

まぼろしの村はどこに 〈国土社の創作どうわ10〉

1979年1月20日 初版発行

1979年5月20日 再版発行

著者 手島悠介

発行者 長宗泰造

印刷所 厚德社

発行所 国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。 〈検印廃止〉

《定価850円》

まぼろしの村はどこに

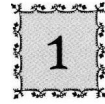
手島悠介・作／藤沢友一・絵



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



母^{はは}とむすめ

谷川の バナナの葉が、風にゆれて、さやさやと鳴^なっていていま
す。

そして、かすかな せせらぎの音。

それに、なんでしょう？

どこからか、カタンパタンという、かわいたようなものの音が、
聞こえてきます。

谷川のほとりに、一軒の まずしそうな家が 見えていま
した。

白っぽい土のかべに、ヤシの葉をふいた屋^や根^ね。一本のパパイ
アの木が、オレンジ色の大きなパパイアを、すずなりにつけて

います。

そのパイアの葉かげの、四かくい小まどから、カタンパタンというものの音が、聞こえてくるのです。

「お母さん、そろそろ、たきぎをとりになくちや。」
と、わかいむすめさんの　はずむような声。

「そうだねえ。サリムがいつてくれればいいのに、あの子は、どこへいったんだろう？」

と、母親らしい、年とった女の人の声もしました。

みすぼらしい家のへやの中では、むすめさんと母親が、二台の機をおっていたのでした。

カタンパタン。カタンパタン。……。

このしずかな谷あいの村までは、まだ戦争は、おしよせてきてはいませんでした。

母親^{ははおや}は、ふと、機^{はた}をおる手を休めました。そのかみの毛には、白いものが、たくさんまじっています。

「リーナ、うまくおれていること！ リーナには、お母^{かあ}さんも、まけてしまっわ。」

「そうかしら……？」

と、むすめは、ほほえみながら、立ちあがりました。

「じゃ、お母^{かあ}さん、ちょっと、山へいつてきます。」

「すまないね。弟の口口は、はたらき者^{もの}なのに、ほんとうにサリムときたら……。」

と、母親^{ははおや}は、ためいきをつきました。

この母親^{ははおや}は、村いちばんの、錦^{にしき}のおり手といわれていました。すえっ子の口口が生まれると、すぐ、おそろしい伝染^{でんせん}病^{びょう}で

夫^{おつと}をなくしてしまい、それから、ずっと錦^{にしき}をおって、この四

人家ぞくのくらしをたててきたのです。

金や、赤や、黄や、みどりの 何色なんしよくもの絹糸きぬいとをつかつて、こまかくおりあげていく 美しい錦にしきのぬのは、手間てまもかかり、たいへんに高くて、とても、いっぱんの人びとの手に はいるものではありません。

ですから、母親ははおやは、いままで 何十なんじゅうまいというすばらしい錦にしきをおりあげていながら、いつも じぶんは、つぎはぎだらけの、青い農民服のうみんふくをきているのでした。ズボンなんか、まるで、かわいたぞうきんのように、見えます。

けれども、母親ははおやは、三人の子どもをりっぱに学校にあげ、子どもたちには、いつも こざっぱりとした服ふくをきせていました。いま、リーナがきているピンクのししゅうの服ふくを、町から買ってきたとき、母親ははおやは リーナに こういいました。





「リーナも、もう花よめさんになる年ごろですもの、きれいに
していなくてはね。」

かわいらしい服を見て、リーナは、ほおを赤くそめました。

リーナには、すきな男の人がいたのです。ハンという、村の
わか者^{もの}でした。このきれいなピンクの服^{ふく}をきたじぶんを、ハン
が見たら、なんというだろうと考えて、リーナは思わず、顔を
赤らめたのでした。

でも、リーナはいいました。

「わたしだけ、いいものをきるなんて、いや！」

「そんなこといわないで、どうか、きてみせておくれ。」

と、母親^{はは}はいい、リーナは、はずかしそうに、新しい服^{ふく}に手
とおしたのでした。

「リーナ、きれいだよ。」

と、まんぞくそうに、母親^{ははおや}は、むすめのすがたをながめました。
母親^{ははおや}にとって、三人の子どもが、すすくとそだってくれる
ことだけが、なによりのよろこびだったのです。



ハイビスカスの花

家をでたりーナは、田のあぜ道のところで、帰ってくるサリムに会いました。

サリムは、つりざおと、竹のかごを持っていました。

「サリム、たきぎひろいを手つだって！」

と、りーナが、明るくいいました。

「だめだよ、おねえさん。こんな大きなコイをつつたんだ。すぐ、持^もって帰^{かえ}らなくちや。」

りーナがのぞくと、かごの中に、うでの長さほどもある銀^{ぎん}色^{いろ}のコイが、口をぱくぱくさせていました。

「わかったわ。今夜^{こんや}は、それで、お料理^{りょうり}をつくりましょう。で



も、サリム、すこしは家のお手つだいもしてね。お母^{かあ}さんがしんぱいしてるわ。」

「でも、ぼく、勉強^{べんきょう}してたんだよ。さかなをつりながら……。ほら。」

と、サリムは、小わきにかかえていた、星のことを書いた本を、かたをつきだすようにして、見せました。

リーナは、顔色もよくなり、やせているこの弟を、いたわるような目で見まもらしました。

そして、ふたりはわかれ、リーナは、山道をのぼりはじめたのです。

かたむいた太陽^{たいよう}の光が、きゆうに弱くなつて、西の空が、もえるように黄ばんできました。

リーナは、ひろいあつめた たきぎを、いそいでたばにまと

めると、お母^{かあ}さんのために、赤いハイビスカスの花のえだをお
つて、山をおりました。

むこうから、すえっ子のロロが、走ってくるのが見えました。
ロロは、まだ四年生ですが、学校がおわるとすぐ、バナナ園^{えん}
にいつて、はたらいているのです。

「やあ、おねえさん。たきぎひろいなら、ぼくがやるのに……。
ぼくが、持^もつていこう。」

ロロは、元気そうな日焼^{ひや}けした顔に、白い歯^はを見せて、そう
いいました。

「いいのよ、ロロ。」

でも、ロロは、むりにリーナのせなかから、たきぎをとると、
じぶんでせおいました。

「おねえさん、北のほうでは だいぶ戦^{せん}争^{そう}がひどいらしいよ。

学校で、先生に聞いたんだ。」

「お金持ちのブンの国をあいてに戦っても、このわたしたちの国は、小さくて、びんぼうなんですもの……。」

リーナは、いいかけて、ことばをやめました。

「おねえさんは、この国が小さいから、まけるっていうの？

でも、大きな国が、力まかせに、小さな国をやっつけようとするなんて、いけないことなんだ。みんなで、力を合わせて、ブンの軍隊をおっぱらってしまわなくちゃ……。先生は、銃を持てる者は、みんな戦場にこうって、おっしゃったよ。」

リーナは、ちらりとハンのことを考えて、くらい気持ちになりました。ハンも、いつかは、リーナをのこして、戦場にいつてしまうのでしょうか……。

「でも、ブンの国には、こわい爆弾もあるのよ。ブンは、その

